

お互いの良さや違いを認め合い、 よりよい生活を追求しようとする子の育成 ～「生きた問い」が溢れる授業づくりを通して～

輪島市立鳳至小学校

1 研究主題

『人生100年時代』を迎えた今日、急激に変化する社会の中で、私たちには生まれ育った背景も文化も違う人々と協働・共生することが求められる。そのため、少なくとも、時代を担う子ども達には、お互いの良さや違いを認め合い、協力してよりよい生活を追求しようとする姿勢を涵養する必要がある。

本研究では、考え方や感じ方が一様ではない道徳的課題について、議論しながら、それぞれの児童が自分としての答えを見いだすとともに他者の考えに触れる中でその価値観を広めたり、認識を深めたりすることができる授業づくりを目指したい。そのために、子ども達に示す「問い」の工夫をテーマに研究に取り組んでいきたい。

2 授業づくり

(1) 生きた問い

①定義と分類

『ねらいとする道徳的価値について、児童の発言や思考の流れから、その理解を更に広げたり、深めたりしていくための発問。』

- ・理由「なぜ?」「どうして?」…考えの根本(もと)となる部分を考えさせる。
- ・具体「例えば?」「どういうこと?」…経験や体験と結びつけたり、理解を深めたりする。
- ・矛盾「～じゃなかったの?」…問題意識を高める、これまでの道徳的価値を覆す。
- ・逆説「～しなくてもいいのでは?」…真逆の内容を問い、道徳的価値の本質を捉えさせる。
- ・仮定「もし～だったら?」…違う場面を想定させ、新たな視点を与える。
- ・変換「〇〇の立場からだ?」…お互いの思いや気持ち、道徳的価値を考えさせる。自我関与。
- ・比較「違いは?」「共通点は?」…同じことでも、奥に隠れた道徳的価値の相違点を考えさせる。
違うことでも、根本にある道徳的価値の共通点を考えさせる。

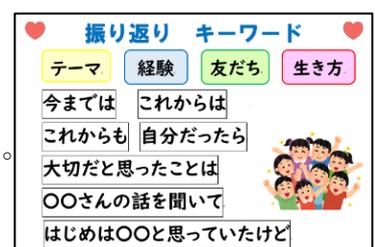
(2) 話し合い

- ①形態(ペア、グループ、フリー)…意図的なグループ構成
- ②進行(全員が話す、質問をする、GTを交える)
- ③受信者、発信者の視点(意識づけ)…発問の再確認、支援の問い



(3) 再構築

- ①今の自分を知る
 - ・意識調査(アンケート)、授業始めの考え
- ②今の自分に気付く
 - ・日常の中に隠れた道徳的価値に教師が目を向けさせることで、その行動と道徳的価値が結びつき、より確かなものとなっていく。
- ③これからの自分を振り返る
 - ・授業後の考え、構造的な板書(見える化)、振り返りの視点



(4) 校内研修 (P) と振り返り (C)

① 価値理解研修

- 重点項目について、学習指導要領より話し合う。教師自身の価値観を広げたり深めたりするだけでなく、価値理解の方法、やり方も確認することができた。

② 発問自己評価シート

- 主題名、教材名、ねらい、1時間を貫くテーマ
実際の発問、児童の反応、工夫、生きた問いとその有効性
振り返り、板書等を記入し自己評価、点検する。

発問	みんなが仲良くお話を聞いて、公算のままりを守るとするよと話を聞かせる。	
書くシート	公算のままりを守るとするよと話を聞かせるか？	
基本発問	公算のままり、公算のままりは、どんな様子で保たれているか？	
	公算のままり、公算のままりは、どんな様子で保たれているか？ 夢中、何も考えない	
中心発問	公算のままり、公算のままりは、どんな様子で保たれているか？	
	公算のままり、公算のままりは、どんな様子で保たれているか？	
補充発問 (生きた問い)	2人は楽しんで遊べたけど、女の子とおばあちゃんにとってはどうだったかな？【要換】	△
	公算のままりはどこにも書いていないし、どんなふうに進んでもいいんじゃないの？【逆説】	○
	みんなはどうしてままりを守っているの？【具体】	○

補充発問 (生きた問い)	2人は楽しんで遊べたけど、女の子とおばあちゃんにとってはどうだったかな？【要換】	△
	公算のままりはどこにも書いていないし、どんなふうに進んでもいいんじゃないの？【逆説】	○
	みんなはどうしてままりを守っているの？【具体】	○

3 基盤づくり

(1) 環境づくり



ありがとうの苗



写真を多用した掲示



GT 振り返り

(2) 心づくり



祭りへの参加(郷土愛)



交通安全教室(命、規則)



心の授業(人間、他者理解)



GTの活用(価値理解)

(3) つながりづくり



保護者参加型授業(家族)



学年目標の発表(他学年)



三夜踊り練習(地域)

R4年度学級経営戦略…3年1組	
生活面の転換	<ul style="list-style-type: none"> ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) →上記の4名に対して注意をする子役もいるが、言い直されるのが嫌いので、注意するのを嫌うようになってきている様子がみられる。 ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等)
学習面の転換	<ul style="list-style-type: none"> ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等)
児童への指示	<ul style="list-style-type: none"> ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等)
力の配属	<ul style="list-style-type: none"> ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等) ●○○○の2人で遊ぶので、授業時間とする。(立ち歩き、私語、書き出す等)
学級経営戦略シート(友達)	

4 成果や課題

(1) 成果

- 効果的な「問い」の精選や児童の思考に沿った言葉の使い分けについての意識が向上した。
- 話し合い活動や振り返りの視点を明確にすることにより、1時間を貫くテーマに沿う内容となった。
- アンケートからは、肯定評価の高まりは見られず、全体的に低下している。しかし、振り返りの量や内容が多岐にわたってきたことから意識の高まりが見られてきたと考えている。

(2) 課題

- 「問い」の更なる精選と児童の思考から、その場で問いを構成する力の向上。
 - 1時間1時間の授業を大切にする。「発問自己評価シート」により、PDCAサイクルを回す。
- 「書く」活動を複数回入れ変容を見取るのは、1時間の授業の充実には適さないこともあった。
 - 発達段階を考慮し、「書く」活動を精選することにより、話し合い活動の充実へつなげる。
- 日々の生活の中(基盤)での道徳教育を充実することにより、生きた道徳へとつなげていく。
 - 地域との連携を密にした活動、ボランティア活動の充実、家庭との連携を充実させていく。
 - 日々の学校生活で、道徳科と関連付けながら指導をしていくことを一層意識していく。

5 低学年分科会テーマ

「生活経験が少ない低学年が、自分ごととして考えられるようにするには？」

(1) 前提として

- ① 前提低学年だからといって全ての内容項目において、生活経験が少ないというわけではない。その時期の一般的な姿としてという意味である。住む地域、出会ってきた人、家族の教育方針等で経験には、大きな差がある。そのため、児童の実態把握は当たり前であるが大切である。
- ② 生活経験が少ない低学年だからこそ、特に学校生活や各教科で、様々な体験をさせていくことが大切である。しかし、その体験が経験となるのは、そこでの教師の道徳的価値項目を意識した働きかけや、声掛けである。

(2) 視点1：動作化 役割演技の留意点

- ① 必要感、決定権、選択肢
 - ・児童主体（「やってみよう」「迷っている」「悩んでいる」「分からない」）で取り組む。
 - ・何のための役割演技なのか自覚させる。
- ② 視点の与え方
 - ・テーマと役割演技につながりをもたせる。
 - ・見ている側の視点も明確にする。（表情、思い、気持ち）
※演技の上手下手に視点がいかないようにする。
- ③ 取り組ませ方
 - ・場面設定、セリフ、始めと終わりのタイミングを明確にし、児童にしっかりと確認しておく。
 - ・モデルを提示するとイメージが湧きやすい。
 - ・雰囲気づくりをして、イメージをつかみやすくする。（音楽、小道具等）
 - ・2つの立場からの場合は、両方させて違いを考えさせる。
- ④ 取り組ませた後
 - ・感想、理由などを問う。
 - ・言葉に表せない児童には、教師がインタビュー形式で問うてもよい。

(3) 視点2：低学年において発問の留意点や工夫

- ① 問いの精選
 - ・「言葉」の精選。低学年にも分かりやすい言葉を吟味する。
 - ・導入で児童に問題意識をもたせて、考えたいと思えるようにする。
 - ・補助発問を多くとる。特に始めの発問は気持ちや、感じたことなど共感しやすいものを問い、それから、どうしてそう考えたのかと問う。
 - ・教師が振り返りを具体的に考えることで、児童に呟いてほしいことを明確にする。その内容が出てくるような発問を考える。
- ② 問い返し
 - ・児童の表情などを見て、意味が分かっていないようだったら問い返す。
 - ・同調する児童に対しても「何が同じだった？」と問い、自分の言葉で言わせる。同じようでも、違いがある場合が多い。
 - ・集中力を持続させる意味でも、「みなさんどう思う？」「〇〇さんどう思う？」などのつながりの発問を多く取り入れていく。
 - ・生きた問い「理由」「仮定」については、注意が必要。
「理由」の問い…感覚的な行動が多い低学年では「なぜ？」を問われても難しいときがある。
「仮定」の問い…想像力が必要な「もし～だったら」は、低学年には捉えにくい。

6 中学年分科会テーマ

「導入から週末まで、ねらいがぶれない筋が通った授業を創り上げていくには？」

(1) 前提として

- ・「ねらいがぶれない」というのは、教師のねらった授業計画通りに授業を進めるということではない。それを基本として、授業の中での児童の発言や思考により、発問を変化させながら、ねらいに迫っていくということである。
- ・「創る」ではなく、「創り上げていく」とあるのは、教師のみではなく、目の前の児童と一緒に創っていくということである。

(2) 視点1：1時間を貫くテーマの工夫

① 問題意識、児童の実態把握

- ・児童の実態に合ったねらい（授業計画）を立てる。
- ・児童の葛藤や「分かったつもり」の概念崩しとなる導入や発問の必要性について吟味し、理解を深める土台を築く。
- ・問題に対する初めの考えを表出させる。

② 自分事として捉える

- ・身近な事柄や実生活を想起させて考えさせる。
- ・実行することの良さや難しさを確認する。

③ 導入の工夫

- ・導入と振り返り、中心発問と振り返りのつながりを考える。
- ・内容項目に関わるアンケート結果から、児童が必要感を感じるテーマを設定する。
- ・写真や動画を用いるなど、児童が授業に臨むための雰囲気づくりに留意する。

④ 言葉にこだわる

- ・児童の実態に合う言葉を選ぶ。
- ・キーワードを教師がもっておく。
- ・心情「～はなぜ大切か？」、態度「～はどうすればいいのか？」

(3) 視点2：発問の工夫

① 事前準備

- ・発問に対して児童がどのような反応をするかシミュレーションする。
- ・児童から出てきてほしいキーワードや、振り返りで書いてほしい内容を明確にもっておく。
- ・道徳的価値の多面性を引き出せる内容を中心発問として設定する。

② 人間理解を大切にする（実践意欲・態度）

- ・きれいごとで終わらないように、頭で分かっているけどできないという人間理解を発問に組み込む。
- ・自分と重ねて考えたり語ったりできるようにする。

③ 児童の発言から考えさせる

- ・複数の発言の中から、ねらいに即した発言に注目させ、全体に問い返す。
- ・適宜、児童の思考に沿った発問に変更し、授業を構成し直す。

(4) 視点3：その他

① 教材分析

- ・学習指導要領に書かれていることが、教材のどこに表れているのかしっかりと把握する。
- ・登場人物の心情が最も揺れ動いた場面を考えさせる。
- ・使用する資料の力を把握する。
- ・教材を分類化する。（伝記、実話、物語という分類だけでなく、主人公の心情の変化をしっかりと読み取り物語の中でも分類する。）

7 高学年分科会テーマ

「児童が多面的・多角的に考えられる教師の働きかけとは？」

(1) 前提として

① 多面的な問い

中心発問。道徳的価値を追求するきっかけとなる発問で、意見や考えが拡散する。そのため、「認め合い」という対話による話し合いになる。

② 多角的な問い

生きた問い。中心発問により広がった考えを分類・整理した後でそぎ落としていき、ねらいとする価値に迫っていく、考えを収束に向かわせる発問。そのため、考えの「磨き合い」という議論による話し合いになる。

(2) 視点1：中心発問に対して多角的に考えさせるための教師の切り返し発問

(方法、場面、タイミング等)

① 児童の考えを受容する→矛盾を突く

- ・児童の考えを一度受け止める。
- ・児童の考えが収束に向かう場面で「矛盾」の問いを投げかけ、多角的に考えられるようにする。
- ・多様な考えや意見を拾い上げてから切り返す。
- ・「じゃあこの場合は？」の逆説や仮定、変換の問いで、児童の思考する視点を変える。

② 立場を明確にする&立場を変える

- ・分かっているつもりのことを、視点を変えて問う。
- ・他の立場からだとどう思うか問う。
- ・必要に応じて役割演技を取り入れる。

③ 対立した立場を取り上げる

- ・Aの立場だけで考えさせ、収束させた後、Bの立場を取り上げ考えさせる方法もあり。
- ・児童の考えや思いを表現させた後、対立する意見を取り上げて児童に切り返す。

(3) 視点2：多面的・多角的な考えを生かす、話し合い活動の工夫（視点、方法、場面、形態等）

① 目的に応じて話し合いの形態を工夫する

- ・座席の配置を工夫したり、全体の座り方を討論形式、ペア、グループにしたりする。
- ・考えを出し合う話し合い（多面的）→ペア、グループ、フリー
- ・考えを深める話し合い（多角的）→全体で
- ・「もし~だったら」という視点を与えたり、機械的にAとBの立場に振り分けたりすることで、客観的に考えられるようにする。
- ・登場人物のそれぞれの立場から考える。

② 話し合いの視点、目的を明確にする

- ・話し合いの視点と目的を児童と確認する。
- ・考えがもてていない児童にも話し合いの視点を与える。

③ 話し合いの環境、雰囲気づくり

- ・自分の体験や経験をもとに語るができる雰囲気をつくる。
- ・きれいごとではなく、本音で語れるような雰囲気をつくる。
- ・話し合い中に、教師が価値付けたり方向付けたりする。また、揺さぶる問いを投げかける。

④ 児童が自分の言葉で語るための支援

- ・思考を整理するツールとして、ノートを使う。（ノートを読み上げるだけでは△）
- ・話し合う時間とメモする時間を区別する。
- ・友だちの考えをメモするのは、一番心に残ったものだけくらいにし、書く時間ではなく話し合う時間を十分に確保できるようにする。
- ・登場人物の心情が時間の経過とともに変化することを可視化した板書にする。